

の相とし、六塵の縁影を自身の相とす、たとへば病目の空中の花及び第二の月を見るがごとし。是れによりて、妄に生死に輪轉する事あり、この故に無明となづく。此の無明といふは、實に體あるにあらず、夢中に人を見るときは其の體なきにあらざれ共、夢さめぬれば其の人ある事なきがごとし。首楞嚴經に云く、妙性圓明にして諸の名相をはなれたり、本より世界衆生ある事なしと云云。諸大乘經みな同じくかやうに説けり、何ぞこれを信せずして、身心を勞役して外に向つて馳求するや。世間の吉凶其の相いまだあらはれざる時は、愚人これをしらす。然れども世間の巫女陰陽師等のうらなひしめす言を信じて、それにまかせてふるまへば、時節到來して其の效をみる事あり。本分の一段は人々具足すれども、いまだ契當せざる人は、日に用ひて知る事なし。是の故に佛祖大慈をたれて叮嚀にしめし玉へり。たとひ宿習うすくして、直下に契當す

る事なくとも世間の陰陽師等を信するがごとく、佛祖の言を信じて、それにまかせて用心せば、何ぞしるしなからんや。

問 此の身は貴賤ことなりといへども、同じく生老病死にうつさる、實に幻化のごとし。此の心は色形なければ、常住不滅なるべししかるを身心俱に幻化のごとしといへることは、何ぞや經の中にも心は幻のごとしと説ける文もあり、心は常住不滅と明せる言もあり、何れの中をか正とすべきや。

答 心といへる言は同じけれども、其の義に種々の差別あり、樹木の皮膚は皆朽失せて其の中の堅實にして、くちのこれる處をも木心となづく、梵語にはこれを乾栗駄といへり、紇栗陀耶ともいへり。密宗に肉團心を明せり、宗鏡録の中には肉團心の梵語は、紇利陀耶といへり。木石等の年を経て精靈あるをも

心といふ。梵語にはこれを矣栗駄といへり、慮知分別するをも心となづく有情の類にこれあり、梵語には質多といへり、凡夫の我心と計する者のは是なり。小乗教の中に心といへるも、此の質多心をさすなり、眞言教に質多心を菩提心と談ずる事あり、凡夫所計の質多にはあらず、梵語には阿頼耶といへるをば漢語には含藏識といへり、即ち是れ第八識なり。梵語には末那といへるは漢語には染汚意となづく、即ち是第七識なり、これらは皆有情の具足せる心法の類なり。此の二つは大乗に始めてあかせり凡夫小乗はかやうの心ありともしらず、第八識は無明と法性と和合する處なるが故に、唯妄にもあらず唯眞にもあらず、此の八識を心王と談ずる教もあり。或は此の上に第九識を立たり梵語には庵摩羅と名けたり。漢語には清淨無垢識といへり、此は是れ衆生の本心なり、迷倒の時も迷倒に染せられず、故に清淨無垢となづけたり、かゝる種々の謂れある

によりて一心についてしばらく眞妄をわかつてり、凡夫の慮知分別は悉く是れ妄心なり、四大和合する時假りに此の相あり、すべて實體なし故にこれを空花にたとへ幻化にたとふかやうの妄心眞心によりてかりに起れり。故にすべて自體なし、たとへば人の本月によりて、第二の月を見るがごとし。月に二相はなけれ共、目をひねる者の所見によせて第二月とは名けたり。心に二相はなければ共迷人の我心と思へるものは實にあらず、故に幻心となづく實は生滅心ともいへり。妄心とて實に生滅する物あるにはあらず、聖人の所見に約すれば常住不滅なり、故にこれを眞心と名けたり。かやうのわけめをしらしめんために、眞心を梵語に説く時は、乾栗駄といへり、樹木の堅實不壞の義になぞらへて衆生の本心の金剛不壞なる事をあかせり。楞伽經の中に、或は自心と説き、或は妙心と説ける心の字の下に皆梵語は、乾栗駄と註せるは此の意なり。梵語の心經

に心の字をば乾栗駄耶といへり、宗鏡録の中には、心にあまたのしなある事を明かして、今は乾栗駄心を宗とすといへり。凡夫の心と思へる者は色形見えずといへ共、刹那に生滅してしばらくも停住せざる事水の流注し燈の焰を續かごとし。色身と同じく、生住異滅すしかるを身は、生滅すれども心は常住なりと思へるは外道の見なり。心を常住といふ事は、凡聖同體にして色心不二なる一心法界をしめすなり。されば語人の所見に約すれば、たゞ心のみ常住なるにあらず身も亦常住なり。しかるを身は生滅し、心は常住なりと申すは、大乘の法門にあらず、大日經の疏に云く、一切衆生の色心實相にして、本より毘盧遮那の平等智身なりと云云。昔南陽の忠國師僧に問て云く、汝何れの處より來る僧の云く、南方より來れり。國師の云く、南方の知識如何か人にしめすや。僧云く、身は壞滅すといへ共、心は常住不滅なり。國師の云く、此は是れ外道

の神我の見なり。僧の云く、和尚如何か人にしめす。國師の云く、我は説く身心一如なりと云云。そのかみ馮濟川といへる俗人ありき、壁の上に死屍を繪にかけるを見て、これを題して一偈を述べ。屍は這裏にあり、其の人何くにか在る、乃ち知んぬ一靈皮袋に居せざる事を、此の偈の意は、一靈とは心をさし皮袋とは身をたとへたり、此の人いまだ神我の見をまぬがれず、故に大慧禪師うけがはず、別に一偈を作り給へり。此の形骸に即して便ち是其の人なり、一靈皮袋、皮袋一靈、濟川が偈は其の意やしりやすし、大慧の頌をばいかゞ心得べき、身心一如なる法門は、大乘の通理なる故に其口頭の所談を取らば、大慧の意にそむくことあらんや。其の心中の計著を論せば、濟川が見を越ざる人も多かるべし、真心妄心の差別は圓覺楞嚴等の經の中にくはしく明せり、具さに引くに及ばず。

問 神我の見とは、いかやうなる見ぞや。

答 數論外道二十五諦を立て世間の諸法を判せり、其の第一をば冥諦となづく、天地いまだわかれざる前は、吉凶禍福にもあづからじ見聞覺知も及ぶことなし、名字をつけがたしといへ共、強て冥諦と號す。是は常住にして生住異滅にうつされず、第二十五を神我諦と名く、謂ゆるよのつねの凡夫の心と名づけ魂と思へる者なり、是をも計して常住なりといへり。其の中間の二十三諦は世間の吉凶禍福等の諸の轉變の相なり、是をば計して有爲の法とす。神我若し吉凶禍福の情を起せば、冥諦變じて其の相をなす、神我若し長短方圓の想を生ずれば、冥諦轉じて其の形を現す。然らば即ち世間の有爲の轉變する事は偏に神我の情を生ずるによれり、神我若し一切の情を生ぜずして冥諦に歸すれば、有爲の轉變永くやみて無爲の安樂自らいたる、色身は壞滅すれども神我は意

住にして滅せず。たとへば家のやくる時、主は出で去るがごとしといへり、忠國師のそしり玉へる神我の見とは是なり、晨旦に流布せる莊老の見解もこれにいでず、老子の虚無莊子の無爲の大道といへるはかの外道の冥諦にあたり。今時大乘の學者の中に、此の見をおこせる人あり、圓覺經に云くたとへば摩尼寶珠の五色に映じて其の色を現する時、愚人かの寶珠に實に五色ありと見るがごとし。圓覺の淨性にかりに身心の相を現する時、愚人これに迷つて實に身心の相ありとおもへり、この故に身心は幻垢なりと説くなり云云。永嘉大師の云く、法財を損し功德をほろぼすこと、この心意識によらずといふことなし。長沙禪師の云く、學道の人の眞をしらざることは、只ひさしく識神をとむるがゆゑなりと云云。初心の學者坐禪となづけて返照する時、此心の形段もなく邊際もなく照す靈々たる處を見て、これを主人公と思ひ、本來の面目と計せり。

古人これを精魂を弄し識神を認むとそしれり、圓覺經の中に賊をとめて子とすと説くもこの義なり。佛の言く、三界は唯一心なり。心外に別法なし一心といへる語は同じけれ共、諸宗の所解各ことなり、小乗の人は六識分別を一心と思へり。大乘の中に或は六識分別よりも、猶微細なる處に第七識第八識ある事を明せり。萬法はみな此れ八種の識の所變なりと談する故に、三界一心と説けるは、此れ八識心王の事なりと思へり。或は此の上に第九識を立て諸法は此識の隨縁の相なり、此の故に三界一心と説けりと談す。小乗の學者は微細の心識ある事をしらざるが故に境界に對する時、執著分別の念だに發らねばこれを至極と思へり。今時大乘を行する人の中に一切の境に對する時分別にわたらず。山をば山と見水をば水と見、僧をば僧と見、俗をば俗と見れ共、是非善惡の執著にわたらぬ處を本心と思へる人あり。是れ即ち六識の中の前五識の分なり、本

心にはあらず、此の心法不可思議なり。太虚にわたれども廣からず、纖芥に入れどもすほからず、一切の相をはなれて一切の相を具し、無邊の徳をそなへて無邊の徳に墮ちず。然れば即ち眞妄をもわかつべからず、龜細をも論じがたし。しかれ共、迷倒の前には眞妄龜細ひとしからず、しかるをいまだ迷倒の見をはなれざる人の即心即佛といへる語に隨つて解を生じて喜怒哀樂の妄情、即ち是れ佛心なりと談す。其の語は佛法に似たれども、其の見は邪道にことならず、かやうの人のために諸の聖教に其のわけめを説き置かれけり。若し能く此の理を分明に知り得たらば、たとひ大悟の分はなくとも、魚目をとめて明珠とするあやまりあるべからず、末代に生れたる人は宿習も淺近なるが故に、教門を學する人は、諸宗に心法の理を説ける種々の文義を學得したるを至極として自ら其の心法の源をさとることなし。禪門に入る人はかやうの事は教家の所談

なり、禪者の學すべきことにあらずと思へり。若しまことに世間の妄想出世の法門ともに放下して、真に無上菩提に趣く人ならば、禪家にすゝむる所なり、しかれ共經論の文義をば學せず、自分の分別にひかれて妄想を起して識神をとめて、本心と思へるはあやまりにあらずや。

問 若し爾は則ち妄心の外に別に真心を求むるあやまりにあらずや。

答 眞妄の差別たやすく説きがたし、同と説き別と説く皆な是れあやまりなり、たとへば人の指にて目をおす時、眞月の外に第二の月をみるが如し。此の第二の月といふ事は目をおす人の前にあり、實には第二の月として眞月の外に其の形ある事なし。然れば即ち第二の月をみるをきらへばとて、此の妄月をばらひのけて別に眞月を見よといふにはあらず、たゞ其の目をおす指をのくれば本月の外に第二の月ある事なし、若し其の指をばのけずして、此の第二の月を

はらはんと思はゞ永劫にもはらひ得る事あるべからず、或は此の第二の月の外に眞月なしとてこれを愛する人あり。亦是大なる錯なり、目をおす事なき人は本より第二の月をみる事なし、何ぞ此の第二の月をばらふべしはらふべからずとの兩論あらんや。然らば即ち妄心真心の同別を論ずる事は迷倒の指を以て本分の目をおす故なり。

問 ゆがめる物をおしなをせば、すぐになるがごとく凡夫の妄心の邪僻なるを修練して、眞正になせば佛心ともなるべきところ覺ゆるを、妄心は第二の月に同じとて一向にきらふことは何ぞや、若し爾らば凡夫の佛に成ることはあるまじきやらん。

答 此の疑は是圓覺經の中の普賢菩薩の疑問なり、首楞嚴經の中に阿難亦此の疑ひを生ぜり。佛阿難に告げて云はく、汝本心を失つて慮知分別の心をと

めて自心と思へり。此れは汝が心にあらず、阿難疑つて云く 六道に輪廻する事も此の心によれり、乃至佛果を得る事も亦此心によるべし。しかるを此の心若し我が心にあらずば何を以て修行して佛果を成すべきや。若し此の心なくば土木瓦石と何ぞことならん、佛の言く、汝が心をおさへて無しと思へといふにはあらず。汝が心と思へるもの實に有る者ならばかならず、在る所あるべし、何れの處にか在るやと問ひ玉ふ時、阿難始めは此の心は身の内にありと答へ申さる。佛汝が身の内にも此の心なきよしを責め玉ふ時、阿難言く身の外にあり佛又これをしからずと責め玉ふ、阿難かくのごとく七處までさし申さる、最後には我が心は内にあるにもあらず、外にあるにもあらず、中間にあるにもあらず、一切無著なるは我が心なりとのべられき。しかれども、佛皆これをゆるし玉はず、この故に阿難茫然として分別する所なし。爾の時に佛の言はく一切衆生

無始より、このかた妄りに輪廻を受けたることは、本心を失ふて慮知の心をとめて我が心と思へるによれり、此の故にたましく佛法を修行すといへども二種の根本をしらずして錯つて修行する故に、二乗外道及び天魔の境界に墮つ、二種の根本とは一つには、本覺妙明元清淨の體なり、此は是れ衆生の自心の本源なり。此の根本をば忘失せり、二つには無始輪廻の根本なり、汝が慮知分別をとめて自心と思へる者なり。若し此の心を以て修行せば、輪廻の業とはなるとも、本源に到ることあるべからず、たとへば砂を煮て飯となさんと思はんがごとし、たとひ劫數をふるとも熟砂とはなるべし、飯とはなるべからずと云云。南岳大師の一乗止觀に云く、止觀の行者先づ心識をして淨心に依止せしむべし。若し生滅の心を以て修行せば、成就すべからずと云云。大日經疏に云く、凡夫二乗外道は無生滅の心をしらざるのみにあらず、生滅の心をも亦しらずと云

云。又云く心性は念をはなれたり、憶度の知るべき所にあらずと云云。占察業報經に云く、心相に二種あり。一つには眞二つには妄なり、眞とは心體如々清淨圓滿にして、一切の處に遍して一切の法を生長す、妄とは分別覺知の心なり、實體あとなくして虚偽の法を出生すと云云。

問 孔子老子等も皆菩薩の化現と申せども、皆この慮知の心をおさむる道を教へられたり、教門の諸宗其の所談ことなりといへども此の慮知の心について、日來の邪心をひるがへして正智となさしむる法門なり、しかるを圓覺楞嚴一向に、此の緣心をは龜毛兕角のやうに説事は何の故ぞや。

答 色心の二法に皆緣生と法爾との差別あり、諸緣和合してかりに生ずる相あるをば緣生となづく、如來藏の中に圓具せる性徳をば法爾といへり。世間緣

生の火は實體なしといへ共、緣に隨ひて其の用をほどこす故に、此の火をよく用ふる時は、寒をふせぎ食を調ふる大益あり。あしく用ふる時は、家をやき財をうしなふ大損あり。しかれば、此の火を損なきやうに用ふべきよしを教ふるは、世間の益のためなり。此の教へのまゝに火を用ふるやうをしりたりとも、いまだ法爾廣大の性火をばしらざる人なり。若し此の性火をしらしめんとせば此の因緣生の火の損益に目をかくることをば制すべし。此の心法も又かくのごとし、此の緣生の幻心實體なしといへども、此の心若し惡を作せば、惡趣に墮して種々の苦を受け、此の心若し善を作せば、善處に生じて種々の樂を受く、此の理をしる故に、凡夫外道の中にも、此の心をおさめて惡事をばせざる者あり。しかれ共緣生の幻心をおさめて一旦人中天上の果報を得たる益ばかりにていまだ本心をしらざる故に、つひに輪廻をまぬがれず、乃至三賢十聖の菩薩も

此の幻心の邪僻をひるがへして、幻智となせるばかりにて、いまだ本心に契當せず。この故に變易生死をまぬがれず、皆な是れ世間の縁生の火をよく受用してあやまちせざる分劑にあたれり。然らば即ち圓覺楞嚴の中には此の縁火をはなれて性火のある事を明かし縁心をはなれて、其の心のある事を談ずるなり。餘宗の法門にはしばらく幻智を起して幻妄をつくして、後は自然に本心に契當すべきことを談せり。又圓覺楞嚴にも幻智を起して、幻妄を除いて後境智俱に妄じて、非幻の處に到るべきことを説けるはこの謂れなり。しかるを末學の中にこの幻智を談ずるを佛祖の本意なりと思へる人あり。圓覺に云く、幻身滅するが故に幻心も亦滅す、幻心滅するが故に幻塵も又滅す、幻塵滅するが故に、幻滅も亦滅す幻滅々するが故に非幻は滅せず。たとへば鏡をとくに垢盡きて明の現するがごとしまさに知るべし、身心はみな幻垢たり、垢相ながく盡きて十

方清淨なりと云云。かやうの經文をあしく心得ていまだ本心を悟らざる人、身心すべて滅盡して空寂なる處を眞實の佛法なりと思へる人あり。此れ二乗の滅盡定外道の悲想定なり。たとへば縁生の火を眞火にあらずときらへるを聞き、此の縁火をみな打滅して暗冥なる處を眞火と思はんがごとし。孔子老子乃至小乗權教の中に此の幻心を修することを談せば皆な是れ方便の説なり。

問 古人の云く、達磨西來して文字を立せず、直に人の心を指て性を
見て成佛せしむと云云。大乘の法門は皆自心是佛と談ず、しかるを見
心成佛とはいはずして、見性成佛といへる其の意いかん。

答 昔僧ありて此の疑ひを起して、忠國師に參じて、心と性ととの差別を問ひ
たてまつる。國師の云く、たとへば寒の時は水を結びて氷とし、暖の時は氷を
とかして水となすがごとし。迷ふ時は性を結びて心とし、悟る時は心を融して

性とす。心性同じといへ共、迷悟によりて差別せりと云云。忠國師かやうに心性のわけめをしめされたるも一往の説なり。語に随つて解を生すべからず性といへる文字は一つなれ共其の義あまたあり。教の中にしばらく三種の義をあかせり、一つには不改の義謂ゆる胡椒甘草等の性各かはりて胡椒はあまくならず、甘草は辛くならざるがごとし。二つには差別の義謂ゆる有情非情の各差別の體性なり。三つには法性の義謂ゆる萬法の本源不二の自性なり、外典乃至小乗教の中には法性を談せず、たゞ不改の性差別の性について性の義を論せり。大乘教の中に法性を談するについて、諸宗の義理差別あり。禪門はこれ教外別傳なりまさにするべし。見性といへども、教門所談の法性の義にもあらざることを、いはんや外典等にあかせる性の義ならんや。人々本分の一段は心とも名くべからず性とも談すべからずしかれども、此の心性の言によせて、本分

をしらしめんために有る時は一心と説き、有る時は一性と談ず、直指人心見性成佛といふ事は、よのつねの迷人の心と思へることは、第二の月のごとくなる事をしらしめんために性と云ふて心とはいはざるなり。見性と申せばとて眼にて見るべきことにあらず、心識にてあきらむる事にもあらず、成佛と申すも今始めて佛に成りて相好を具し光明を放つべきにはあらず。たとへば酒に酔ふて始めて佛に成りて相好を具し光明を放つべきにはあらず。たとへば酒に酔ふて本心を失へる人の時節到來して酔狂、忽ちにさめて本心になるがごとし、日來の迷倒忽ちに休憩して直下に本分に契當するを見性成佛と名けたり。大慧禪師の云く、無眼の宗師の人にしめすことは、皆な是れ曲て人心をさして性を説いて成佛せしむるなりと云云。今時の知識の中にたゞ心性の義理を説いて人にしらしむるを直指と思へる人あり、學者の中にもかやうの法門を解了するを得法と思へる人あり。これをば説性といふべし見性とはいふべからず。

問 經の中に諸法は皆是れ虚妄といへる説もあり、或は諸法は皆是れ常住實相なりとも明せり、何れをか實義とせんや。

答 本分の處には常住の相もなく虚妄の義もなし、しかれ共凡夫の所見によせてはこれを虚妄と説き、聖人の所見によせてはこれを常住と明かすに眞實大悟の人は凡夫の所見にもあらず、聖人の所見にもあらず。然らば即ち虚妄と説き常住と談ずるは皆な是れ方便の説なり、楞伽經の中に外道佛に問ひ奉るは諸法は皆な無常なりや。佛の言はく、汝が所問は世間の戲論なり、外道又問て云く、諸法は皆常住なりや。佛の言はく、此の問も亦是れ世論なり。維摩經に云く、生滅の心を以て實相を談ずる事なかれと云云。若し人其の所見は凡夫にかはらずして諸法實相の旨を談せば皆是れ戲論なり。邪人正法をとけば正法も亦邪法となる正人邪法をとけば、邪法すなはち正法となるといへるは此の義なり。

問 凡聖所見の差別いかん。

答 禪宗には直に本分をしめす、故にかやうの事を論せず、教の中には種々の義あり、しばらく首楞嚴經の説相について粗申すべし。彼の經の中に七大を明せり謂ゆる地大水大火大風大空大根大識大なり。此の七大皆な是れ如來藏の中の性徳として、法界に周遍し融通無礙なり。これを性火性風等となづく眞言教の中に六大無礙にして諸法の體なりと談ずるもこの意なり。たゞし眞言教には根大をあかさず、根大とは眼耳鼻等の六根も皆な法界に周遍せる義なり。眞言には六大を法界の體とす、楞嚴經には如來藏を諸法の體とす、七大は皆如來藏所具の徳用なりとあかせり。皆な是れ如來の隨宜説法なり、眞言に六大と申すも縁生の水火等をさすにはあらず、楞嚴經に性火性水等といへる六大なり。四曼と談ずるは縁生の諸法なり。この故に六大を體とし四曼を相とし三密を用と

すと明せり、七大に皆な同じく性徳と縁生との差別あり。先づ一大をよく心得ぬれば諸大も亦同じかるべし。世間に木の中より鑽出し石の中より打出せる火はこれ縁生の火なり。此の火は實體なし薪にても油にても其の縁なくともゆるることなし。薪油等の縁ある時かりに其の相を現す、故に虚妄にして實體なしと説けり。顯密の諸經にも縁生の諸法の實體なす事は同一説なり、性火といへるは法界に周遍して、燃ゆることもなく滅する事もなし。凡夫はたゞ縁生の火をのみ見て性火をばしらす。若し知り得ぬれば縁火とてきらふべきことなし、縁火は是性火の用なるが故に此の火大のごとく餘大も亦然り。乃至識大とは衆生の心識なり、それもよのつね凡夫の心と思へるは縁生の心なり、經の中にこれを縁心と説けり。此の心はすべて實體なし、六塵の縁によりてかりに見聞覺知の相あり、縁生の火の薪油等の縁によりて、かりにもゆる相あるがごと

し。愚人はたゞ縁心をのみ知りて性心をしらす、外典乃至小乗教の中に心といへるは皆是縁心なり、大乘の中に八識を談するも猶是れ縁心の分劑なり、是を以て極大乘の中に第九識を立てたり、是れ即ち性徳の識大をしらしめんためなり。諸法といへるは色心二法なり、七大の中に識大はこれ心法なり、其餘の六大は皆色法なり。然れ共此の七大ともに如來藏の中に具足して五融無礙なるが故に色心の差別なし、これを眞法界となづく差別なしといへ共、色心混濫する事なし。然らば即ち其の色法も生滅盛衰の形相にあらず、其心法も動靜起滅の轉變なし、經の中に諸法實相常住と説けるは此の義なり。凡夫の妄見起る時、此の如來藏虚妄の縁に随つて色心諸法の相を現す、凡夫の妄見轉變するが故に其の所見の諸法も亦皆な轉變の相あり。たとへば舟の行く時、岸のうつると見ゆるがごとし、又翳眼にて見る時、虚空皆な花となりて亂起亂滅するがごとし。

諸法は皆な是れ虚妄と説けるは此の義なり、然らば則或は諸法虚妄と説き、或は諸法常住と談ず、其の言句は異なりといへども、其の法體はこれ同じ佛意をしらざる者のは其の言句の差別に随つて此れを取て彼を捨つ皆な是れ世俗の戲論なり、翳眼の人と明眼の人と二人同所にありて虚空に向へる時、翳眼の前に積々の花ありて亂起亂滅する相あり。しかれ共明眼の人は亂起亂滅の處をあらためずして清淨の虚空とみるがごとし、煩惱即菩提生死即涅槃常位即妙不改本位といへるも此の義なり。當相即道即事而真と申すも、此の謂れなりしかるを凡夫所見のまゝにて、やがて佛知見なりと心得たるは大なる錯なり。若しさやうならば諸佛の出世し玉ふこと何事のためとか申すべきや顯密の宗師みな學者のために修行をすゝめ玉へるは何事の對治のためぞや、古の大師達みな聚落の外に伽藍を立て女人を入れられず、酒肉等を制し玉へる事は何の謂ぞや。

問 佛眼にては凡夫と同じく、縁生の諸法を見ることあるまじきやらん。

答 教の中に五眼を明せり、其の義一説ならずといへども、しばらく一義をのぶべし、一つには肉眼よのつねの凡夫の所見なり、六眼淨を得たる人は肉眼のまゝにて三千世界を見ることあり。二つには天眼天人の所見なり、山川牆壁をへだてたる物をも見るなり、これも凡夫の所見なり、聖者の天眼は三千世界をも見るべし。三には慧眼諸法皆空の智慧なり、これは偏に菩薩の所見なり、二乗も少分此の智を得たりとゆるす事あり、四つには法眼諸法如幻の相を見る智慧なり、これも菩薩の所見なり、此の四眼は世間出世ことなりといへども皆な是れ縁生の法の上について見かへたる分劑なり、五つには佛眼即是佛の内證の智なり、凡夫乃至菩薩もしることあたはず。涅槃經に云く、聲聞の人は天眼

ありといへ共これを肉眼とす、大乘を學する者は肉眼なりといへどもこれを名けて佛眼とすと云云。この文のことは佛眼の如來のみ具し玉へり、凡夫にはか
 けたりと心得べきにあらず。先徳の云く、四眼二智は萬象森然たり、佛眼種智
 は真空冥寂なりと云云。しかれ共佛は五眼ともに具足し玉へる、故に凡夫に同
 じて世間の相をも見玉ひ、菩薩に同じて諸法の空理をも照し、縁生の如幻をも
 解し玉へり。凡夫に同ずといへ共生滅去來の相に墮ちず、菩薩に同ずれども空
 理幻相にも居せず。然らば即ち五眼の差別をわかつ事は、凡情に約してしばら
 く談ずることなり。佛知見に約すれば迷悟眞俗のへだてもなく、性相事理のわ
 けめもなし。たとへば凡夫の前には金銀瓦石水火草木其の品同じからず、佛は
 金を石となし火を水ともなし玉ふ、故に火に入れどもあつきことなく水にいれ
 どもつめたきことなし、金銀なればとて瓦石にまされることもなく、瓦石なれ

ばとて金銀よりもいやしきこともなきがごとし、いまだ此の自在を得ざる人の
 水火もへだてなし、金石も同じこと、申すはあやまりなり、佛知見を悟らざる
 人の迷悟性相のへだてなしといふことも亦かくのごとし。

問 教門に大小權實の差別ありと申すはいかなる義ぞや。

答 眞實の法理には大小權實の差別なし、しかれども學者の智慧に淺深ある
 が故に所解の法門にも亦差別あり。法華經に云く、如來の説法は一相一味なれ
 ども衆生の性欲ことなるによりて解する所の法門各差別せり。たとへば天よ
 り一雨をくだす時諸の草木その根莖枝葉の大小に随つて潤をうくること差
 別あるがごとし云云。

問 法理に差別のあることは、機根の同じからざる故なり、機根の同
 じからざるとは何の故ぞや。

答 一眞法界の中には人もなく法もなし、迷情に約してしばらく人法をわか
 たり、衆生の根性種々ななりといへ共、總てこれをいはゞ五類あり。一つには聲
 聞性、二つには縁覺性、三つには菩薩性、四つには不定性、五つには闍提性な
 り。聲聞縁覺の二乗は所學の法門ことなりといへども、たゞ自ら出離する道を
 求めて他を益する心なし、この故に同じく小乗心となづく衆生を利益せんため
 に大乘の道を求むるをば菩薩と號す、有る時は小乗心を發し、有る時は大乘心
 を發して根性さだめなきは不定性なり、一切の佛法をすべて信せざるをば闍提
 性となづく、平等一性の中に一念の無明起る故にかりに五性の差別を成せり、
 各の根性のかはれる處を論せば實に同じといふべからず、この故に五性各別
 の法門あり。圓覺經に云く、一切衆生貪欲を本とするによりて、無明を發揮し
 て五性の差別を顯出せり。又云く、圓覺の自性は五性にあらず、五性に隨つて

差別の相を現す、實相の中には菩薩及び諸の衆生なし、何を以ての故に菩薩
 衆生は皆な是れ幻化のごとしと云云。像法決疑經に云く、如來は有にあらず無
 にあらず出にあらず没にあらず色にあらず非色にあらず、初成道より涅槃に至
 るまで其の中間において。一句の法をも説くことなし。しかるを愚人は如來出
 世して法を説きて人を度すと思へり。如來の境界は不可思議なり、識を以ても
 知るべからず、智を以ても知るべからずと云云。又云く、衆生の身相は幻化の如
 く鏡像の如く水月の如し、衆生の心相も不可思議也、來に非ず去に非ず有に非
 ず無に非ず内に非ず外に非ず。しかれ共衆生迷倒してふかく我見に著する故に
 妄に輪廻を受たりと云云。楞伽經に云く、始め鹿野苑より終り、跋提河に至る
 まで、いまだかつて一字をも談せずと云云。華嚴經に云く、眞淨界の中には佛
 もなく衆生もなしと云云。釋論に云く。不二摩訶衍は機根をはなれ教説をはな

れたりと云云。摩訶衍とは大乘の梵語なり、大小權實いまだわかれざる處を不
二摩訶衍と名けたり、かやうの聖教をば信せず、方便の門に心をつけて教に大
小權實を論じ機に上中下根をわかたつ故に、或は高慢の心を起して魔道に入り、
或は退屈の思を生じて迷衢にかへるこれを智人といふべしや。

問 教の中にも佛の相もなく、衆生の相もなしと談ぜり、禪宗に生佛
いまだわかれざる處といふに同じからずや。

答 教の中に凡聖の相なしと申すは、凡聖わかれたる處について、其の體性
の無相なることを談ぜり。禪宗に生佛已前と申すは此の義にあらず、其の語の
似たるを以て禪教同とは申すべからず、たとへば人の面のやうをそらに語る時
額の中に眉あり眉の下に眼あり眼の下に鼻あり鼻の下に口ありと申せば、貴賤
男女みな同じ面なるやうに聞ゆれ共、若し實に其の面をみる時は各ことなる

かごとし、教門には言句義理を以て法門とする故に、義理の分劑について大小
權實を判せり、教外別傳不立文字といへる題目を見ながら宗師の言句について
教禪の同意を論せばあたるべからず、今時の禪者の中に宗師の人に示さる言句
の中に教家の法門にかはりたる事のあるを見て、これを禪の勝れたる證據とす。
若し教の法門にかはりたる故に禪は勝れたりといはば禪にかはりたる故に教を
も勝れたりといふべし。然らば即ち教外別傳の宗旨何ぞ言句義理の同異にあづ
からんや、或は云く教は皆な言句義理の上に談ぜり、言句義理にあづからざる
處禪門の宗旨なりと云云。若ししからは教の中に言句義理を立ざる法門あり、
これを禪宗といはんや、或は教者の中に教外別傳不立文字といへども禪師の人
にしめす言句多し不立文字といはんやと難する人あり、禪師の言句多しといへ
共此の言句の義理を人に習學せしめんためにはあらず、ただ佛法の正理は言句

の上うへにあらざる事ことをしめさんためなり、言句ごんごの上うへにあらざると申まをせばとて言語道ごんごだう断だんの處ところを宗旨しうしとするにもあらず、寂黙沈空じやくもくちんくうの所ところを指示しじするにもあらず、古人こじんの云いはく達磨西來だつませいらいの別べつに一法いっぽうの人ひとのために傳授でんじゆするなしたゞ人々具足じんくぐそくし、箇々圓成こゝゝゑんじゆする底ていを指出ししゆするのみなりと云云うんぬん、既に人々具足じんくぐそくといへり、何ぞひとり禪者ぜんしやのみ具足ぐそくして教者けうしやにはかけたりといはんや、たゞ教者けうしや禪者ぜんしやのみ圓成ゑんじゆするにあらず。田夫野人でんぶやじんの農業のうげふをはげむ所ところにもあり、鍛冶番匠かぢはんしやうの工巧こうけうをいとなむ所ところにもあり、要えうを取とていはゞ、一切衆生さいしゆじゆの所作しよさ所爲しよゐ見聞覺知行けんもんかくちちぎやう住坐臥遊戯談論ぢゆうざゐぢゆうぎだんろんの所皆ところみな悉ことごとくく西來せいらいの玄旨げんしにあらずといふ事ことなし、何いかにいはん佛ぼつの教をへに隨しゆつて種々しゆくの善行ぜんぎやうを修しゆする人ひとをやしかれども、此この玄旨げんしあることを知らざる故ゆゑに、世間せけんの幻相げんさうはばかされて妄みだりに輪廻りんゑを受うくる者多ものおほし。佛ぼつ此この妄想まうさうをやめんために種々しゆくの法門ほふもんを説さき玉たまへば、又また此この法門ほふもんを執著しやくちやくして玄旨げんしをくらませる人ひとあり。是この故ゆゑに祖師そし

西來せいらいして、本分ほんぶんの一段だんを指出ししゆす、この心こころを以もつて心こころに傳つたふる、教外けうげの玄旨げんしとなづく。教外けうげの玄旨げんしとて諸教しよけうにかはりたる一段だんの法門ほふもんを相承さうじゆするにはあらず、若しもし言句ごんごにて相承さうじゆすべき法門ほふもんならばたゞ是これめづらしき教法けうほふなるべし、教外けうげ別傳べつでんとはいふべからず、六祖ろくそよりこのかた五家ごけわかれて各おのの宗風しゆふうを立つといへ共とも、亦また同じく人々具足じんくぐそくすることを悟さしめんためなり。しかるを今時こんじの學者がくしや此この玄旨げんをば悟さらずして宗師しゆしの差別しゃべつの言句ごんごを記持きぢして五家ごけの宗旨しゆしについて得失とくしつを商量しやうりやうし、諸教しよけうの法門ほふもんと勝劣しやうれつを批判ひはんす、西來せいらいの祖意そいを失うへるにあらず、予昔遊山よおきゆうさんの次ついでに同伴どうはんの僧七八人そうしちはんつれて富士山ふじさんの邊へり西にしの湖みづうみといふ所ところに到いたり、神仙しんせんの境きやうに入いれるがごとし、物ものごとに目めをおどろかさすといふ事ことなし。其その浦うらの漁人ぎよじんをやとふて舟ふねをこがせて入江入江いりねいりみにこぎ入れて見みればいやめづらしき勝地しやまちなり、僧達そうだち感かんにたへず一同いどう舷なはたをたゞきてとよみあへり、舟ふねをこぐ老翁らうおうは幼少わうせうの時ときよ

り此の浦にすみて、朝夕に此の景を見たれども。其中の清興をしれる情なし、僧達の感歎するを見て問ていはく何事を見てかやうにをめき給ふぞ、僧達答ていはく、此の山のけしき湖のありさまの面白き事を感ずるなり。此の翁いよく心得ずげなるけしきにて、これを見給はんとてわざと來り給へるかといふて不思議の思をなせり。予僧達にかたりて申すやう、此の翁若し我れ等が入興のところを習ひ傳へんと、いはいなにか彼に教ふべきや。若し此の山水のけしきを指して、我れ等がおもしろきことは、かゝる處にありといは、此の翁さては、我が年來見つくせる境界なり、めづらしからずといふべし。若し又此僻案をあらためんために我等がおもしろき事は、汝が所見にかはれりと、いははさては此西湖の外に別に勝れたる名所のある故に、我が所見をばきらふと思ぬべし、教外別傳の宗旨も亦かくのごとし、一切衆生の所作所爲にかはれるに

もあらず、内典外典の言句義理にことなるにもあらず、しかれ共此の中に玄旨ある事をしらざる人は教外別傳といふを聞きて種々の疑あり。或は三毒煩惱をほしいまゝにして此の外に玄旨なしといふ者のあり、或は儒教道教を習ひ得て祖旨の玄旨にかはらずと思へる人あり。或は教門の諸宗を解了して、教外の玄旨とて別にある事なしといふ人もあり。或は禪門の五家の宗風を度量して、これを祖師の玄旨といふ人もあり。かやうの見解は皆な是れ彼の漁翁が僧達の清興は、我が日來の所見の處にありと心得たるがごとし、かやうの見解を捨てしめんために宗師手段をあらためて内外の法門も玄旨にあらず、一切の所作所爲は皆妄想なりとしめす時、愚人これを聞きて凡夫の日用のほかには玄旨をもとめ内外典の外に別傳をたづぬ。是れ彼の漁翁が西湖のほかには別に名所を求めんがごとし。僧達の漁翁にかはれる事は、其所見の山林水石の勝劣にはあらず、

其の中に清興のある事を知ると知らざるとの差別なり、此の清興をば人に教へり、習はしむる者にもあらず、拈出して人に見せしむる者にもあらず、時節到來してかやうの清興の心に相應する時始めて自らしるべし。本分の一段も亦かくのごとし、自らしたしく此の田地に到つて始めて知るべし。自ら知ること分明なりといへども拈出して人に示すことあたはず。然らば即ち人々具足すといへども相應せざる時は、所作所爲皆な是れ輪廻の業となれり。古人の全是全不是といへるは此の意なり、しかるを内外典の言句を禪宗の言句にとり合せて同異勝劣を批判するはいまだ祖師の立旨をさとらざる故なり。

問 禪門に五家とて、宗派のわかれたることは、得法にあまたの階のあるやらん。

答 得法に階のあまたある故に、五家のわかれたるにはあらず。學者をして

本分にいらしめんとす手段のかはれる故なり、教家の法門の面々の所解のかはれる故に所談の宗旨も、又ことなるには同じからず、禪門には直下に本分の田地に契當するを得法となづく。佛祖の法門を解了するを得法と申すにはあらず。是の故に人にしめす言句も解了の上の法門にはあらず、學者をして直下に悟らしめんとする手段なり、有る時は理致をとき、有る時は機關をしめす、皆な是れ情識の所解にあらず、これを祖師の關と名けたり、大慧禪師の云くたとひ實悟實證あれ共、若しいまだ大法をあきらめざる人は、自證自悟の處を説きて人にしめす故に人の眼をくらますと云云。これを以て知るべし、明眼の宗師のしめす所は自證自悟の處にあらざること、昔官人ありて、五祖の演和尚に參じて禪門の宗風を問ひたてまつる、五祖の云く、吾が家の宗風は情識の解了すべきことにはあらず。然れ共小艶の詩に云く、一段の風光は晝くとも成せず

洞房深處に愁情をのぶ頻りに小玉をよぶ、元より事なし、たゞ檀郎が聲を認得せんことを要す、此の詩の意によせて大概をしるべしと云云。此の詩は是れ女人の作なり、檀郎とは此の女人の忍びて申しかよはせる男なり、有る時彼の男此の女人のすみける洞房の邊に來りてあそびけり、此の時女人は此の洞房の内にありと知らせたく思へども、外聞もつゝましく覺ゆる程にめしつかふ小玉をしきりによびて障子あけよ、簾おろせなどいへども、其の意すべてかやうの用事にはあらず、たゞ偏に彼の男の此の聲を聞きつけて、此の女房は此の内にありけりと、しらんことを要するなり、五家の宗風も亦かくのごとし。皆な是れ小玉をよぶ手段の其の言句體裁のかはれるについて勝劣得失を批判するは、宗師の本意を知らざる人なり。

問 古人の機縁問答の中にも、たがひに褒貶の語あり、何ぞ學者のひ

はんをきらふや。

答 宗師のたがひに褒貶する事は亦是れ小玉をよぶ手段なり、これは抑揚褒貶となづく人情我執の上において論量するには同じからず、永嘉大師の云く、或は是、或は非人しらず逆行順行天もはかりがたし。

問 如來一代の説法の時も、かやうの手段をほごし給ふことありや。

答 禪門の眼にて見る時は一代の所説も、皆是れ小玉をよぶ手段なり、有る時は諸法無常と説き、有る時は諸法常住と談ず、或は諸法皆是虚妄と明かし、或は諸法實相と演ぶ、或は一切の文字は佛法にあらざとしめし、或は言説皆是れ法身なりと言へり、かやうの種々の法門は、皆是れ小玉をよびて有る時は障子をあけよといひ、有る時はたてよといへるがごとし。如來の本意はかやうの言句の上にあるにあらず、しかるを佛意をしらざる人其の言句の義理をとりて

我が妄情にかなへる言を信じて佛の本意なりと思へり、小玉をよぶ言について障子をたてよといふこそ、此の女人の本意よあけよといふこそ本意よと、論せんがごとし。或は云く、如來は法に定相なきことを悟り給へる故に、一定の所説なし有る時は無相と説き給ふことは實際の理地に一塵も立せざる謂れなり、有る時は諸相歴然たりと説き給ふことは、隨縁の事門に十界の依止ある事を示し給ふ故なり云云。かやうに心をやる人は、佛の一法門を信じて偏執に墮ちたる人よりも勝れたりといへども、是も亦佛の本意を知らざる人なり、小玉をよぶ處について推量をめぐらして、障子をたてよといふは風をおそるゝ故なり、あけよといふは氣のこもりたるを散せんためなり。是故に定説なし一概を信すべからずといはんがごとしかやうに料簡するも女人の本意をばしらぬ故なり、起世經に云く火神の水に入る時は水も火となり、水神の火に入る時は火も水となると云

云。法門も又かくのごとし禪の眼にて見れば教法も亦禪の宗旨なり、教の眼にて見れば禪の宗旨も、又教法とことならず、教禪の差別のみにあらず佛法世法の差別も、又かくのごとし。佛法の慧解ひらけぬれば、世間の相も皆佛法なり世間の情を出脱せぬ時は甚深の妙理と心得たるも皆是れ世法なり。

問 如來の説法に二種あり、一には隨他意語佛の機に隨つてしめし玉へる方便の語なり、二には隨自意語佛の本意のごとく説き給へる語なり、禪門に小玉をよぶ手段といへるは、隨他意語にあたるにあらずや。

答 如來の説教については、是は隨他意是は隨自意と決定して談するは、教門の施設なり、禪門の宗師の佛説を擧揚する時、或は是を隨他意説としめし、或は是を隨自意語といふ。皆是小玉をよぶ手段なり決定の説にあらず。然らば即ち今日隨自意語といへる、佛説を明日は隨他意語といふこともあるべし。唯

此兩語のみにあらず、淺略深祕乃至妄執言說如義言說等の法門も又かくのごとし、古人の云く禪門の宗旨は教家の法門の一尺はつひに一尺、二尺はつひに二尺なるには同じからずと云云。釋迦如來我は教者とも仰られず、禪者ともなかり給はず所説の法門においても是は教の分なり、是は禪の分なりともわけられず、如來の内證は教にもあらず、禪にもあらざる故なり、此内證不思議の應用機に随つて教禪の差異をなせり。經に云く、佛は一音を以て法を説き給へば衆生其の類に随つて、各解することを得と云云。佛在世の時は其の解了ことなりといへ共禪僧教僧とてわかれたる事はなかりき、佛滅後に始めて禪教二門わかれて教に顯密の諸宗あり、禪に五家の差別あり、其故は先づ各解の性欲に随つて方便をたれて、如來の本分の宗旨をしらしめんために、如來の化儀を紹隆し玉ふ、大智高德の人、或は教家の宗師となり、或は禪門の祖師となりて各

一雙の手を出だして迷倒の偏執を破り、教禪の兩岐を越えて本分の田地に到らしめんとす。然らば即ち眞實の教師の其の本意教の内にあるにあらず、明眼の禪師其の本意禪の中にあるにあらず、しかれども面々所談のかはれることは皆是れ小玉をよぶ手段なるが故なり、末代に至りて禪けうの學者の中に偏執を先とする人は是非海の裏にしづみて佛祖の本意をくらませり、像法決疑經に云く文のごとく義をとるは三世諸佛のあだなりと云云、明眼の宗師は胸の中にかねてよりたくはへたる法門なし、只是れ機に當りて提持し口に信せて道著す、すべて定まれる窠窟なし若し人禪を問ふ時、或は孔孟老莊の言を以て答ふる事もあり、或は教家所談の法門を以て答ふる時もあり、或は世俗の諺を以て答ふる事もあり、或は目前の境界をしめす時もあり、或は棒を行じ喝を下し指を擧げ拳をさゝく、皆是宗師の手段なり、これを禪門の活弄となづく、いまだ此の田

地に到らざる者の情識を以て計度すべき事にあらず。

問 理致機關と申すことは、何かなる義ぞや。

答 若し本分を論せば、理致となづけ機關となづくべき法門なし、しかれども、方便の門を開きて宗旨を擧揚する時、義理を以て學者を激勵する法門をば理致となづく、或は棒喝を行じ、或は義理にわたらざる話頭をしめすをば機關とはなづけたり、いづれも皆な小玉をよべる手段なり。古人の云く馬祖百丈以前は多くは理致を談じ、少きは機關をしめす、馬祖百丈よりこのかた多くは機關を用ひ少しき理致を示す、是れ即ち風を看て帆を使ふ手段なりと云云。今時の學者の中に理致を貴ぶ者は、機關を愛する者は理致をきらふ皆な是れ祖師の手段をしらざる人なり。若し是れ機關の法門勝れたりといはば馬祖百丈以前の宗師は眼なしとせんや、若し理致の法門勝れたりといはば臨濟德山は宗旨

をしらすとせんや、釋迦如來の説法五十年三百餘會の法門あり。しかるに楞伽經の中に始め、鹿野苑より終り跋提河にいたるまで、其の二中間においてかつて一字をもとかすと云云。若此の趣をしらば理致とてきらふべき法門あらんや、昔法眼禪師覺鐵背に問ていはく、趙州和尚に庭前柏樹子の話ありと、是なりやいなや答て云く。先師に此語なし、先師を誘ふことなかれと云云。覺鐵背は是れ趙州の高弟なり。しかるに先師に此の語なしといへる事は何ぞや、趙州の庭前柏樹子としめし玉へる語の上について、とかくの解會を生ずる人いかでか覺鐵背の意にかなはんや、たゞ此の公案のみしかるにあらず、宗師の示すところの餘の公案も皆以てかくのごとし。其の手段のかはれるについて解會を生せば祖意をくらませる人なるべし。解脱自在を得たる人は、金を握りて土となし土を取りて金となす、此の人の手の中に入れたるをこれは金なり、これは

士なりと定めんや、法門も亦かくのごとし、明眼の人のしめす、法門をこれは理致なり、これは機關なりといひ定めはあたるべからず。

問 淨土宗を信ずる人のいはく、末代の人は大乗を修行すとも、悟證あるべからず、しかれば先づ念佛の行を修して、淨土に生れて後大乘に入るべし、或はいはく上代末世を論ぜず、諸宗の中には念佛の法門最上なり、其の故は罪惡の衆生をもきはらず、愚癡の凡夫をもすてずたゞ名號を唱ふれば淨土に往生して、やがて正覺を成すこの故に、これを易行門となづけたり、超世の願ともいへり、しかれば難行門を修する人はいたづらごとなりと云云。かやうの法門其の謂れありや。

答 念佛の法門を立らるゝ人も釋尊の説をうけ玉へり、諸の大乗經は釋尊の説にあらずや、諸の大乗經の中には未來末世に大乘を修せん者のためと説かれたり、末代の衆生は大乗を行すべからず、たゞ念佛の行を修すべしと説か

れたる大乘經はすべてなし、但し人の根性まち／＼なれば、大乘の宿熏なき故に念佛の法門を信する事をばそしるべからず、かゝる機根のために如來此の一行を説き玉へり、たま／＼前世の宿習によりて、大乘を學する人の中に大乘の法門にまかせて行すれ共、たゞ妄念のみ起りて真心は發せず、かくて一期をすごしなば當來の惡報のがれがたし。然れば他力本願をたのみて西方淨土を願ふべしといふ人あり、かやうの人は大乘の法門を學しながら、いまだ大乘の題目をだにしらざる人なり。惡趣の外に淨土をねがひ自力他力をわから、難行易行を論ずるは、皆な是了義大乘の題目にあらず、若し此の題目を信する人はいまだ分明に悟りて、開くことなくとも妄念の起るによりて退屈すべからず。いはんや惡趣淨土を論じ、自力他力をわかつたんや、惡趣淨土の差別は一念の上にかべる假相なり、圓覺經に云く、一切の佛世界も空花のごとしと云云。たゞ大

乗の題目を信じて行住坐臥わすれずば、やがて悟りを開くことなくとも惡趣に墮する事あるべからず、たとひ前業は重く行力はよはき人、一旦惡趣に入れども大乘の信解くちせぬ故に、やがて其の中より解脱を得べし、龍女は畜生道に墮ちしかとも八歳の時、即身成佛しきこれ其の證據なり、阿闍世王今生に父を殺して逆罪をつくりしかとも涅槃會上に到りて果を證せり、佛阿闍世に告て言はく汝と我れと毘婆尸佛の時、同時に大乘心を發しき、然れども汝は懈怠にして修行せず、是の故にいまにいたるまで佛道を成せず、しかれども大乘の信力のくちせぬ故に毘婆尸佛よりこのかたついに惡趣に生せず、國王大臣の家に生れたり、其の宿習開發せる故に今生逆罪をつくるといへども、今我れにあふて證果せりと云云。經に云く、大乘をそしりて地獄におちたるは百千の塔婆を造立するにはまされり、たとへば人の地に因つて倒れて地に因つて起るがごとし

と云云。此の文の意は大乘を誘する罪によりて、一旦地獄に入れども大乘を聞きつる縁によりてついに解脱を得る謂れなり。何かに況んや大乘の題をわすれずして形のごとくも行せん、人をや大乘の題目は、凡聖もへだてなしといへることを信ずれども、いまだ分明に此の理をさとらざる人のために、種々の行をあかせり。行相は種々なりといへ共、小乗の修行の生死の外に涅槃をもとめ、權教の修行の安心の外に真心をもとむるには同じからず、無修にして修し無證にして證すといへるは、此の意なり、大乘の題をばわすれずして、其の中に經をよみ呪を誦し、佛の名號を唱ふる事は妨げあるべからず、無明妄想にばかされて大乘は難行なり、他力をたのむべしといふ、人をば大乘を學したる人と申すべからずしかるを、我れは大乘の法門を學得したれ共、これは難行なれば念佛の行を修すべしといへるは、誹謗大乘の人なり、大乘の法門をしらねばたゞ

念佛の行を修すといはればさもありぬべし。或は云念佛の法門は罪惡をもきはす、愚癡をもすてず、たゞ名號を唱ふれば淨土に生れてやがて成佛す、この故に最上の法門なり、餘宗の法門は皆難行門なるが故に、下劣なりと申す人あり、若まことに罪惡愚癡の人また彌陀の名號を唱ふれば、やがて正覺を成ずることならば、末代下根の衆生ばかりに相應せる法門にはあるべからず、上代上根の人のためも難行の法門を説くことは枝葉あるべし。しかるに釋尊一代の説法多くはこれ淨土宗よりきはるゝ難行門の説なり、其中に念佛往生のことを説ける經はすくなし、正しく淨土の行門を説けることは淨土の三部經のみなり、如來は無智にしてかやうに枝葉の法門を多く説き玉へるならんや。

問 念佛の法門も大乘なりといふ人あり、其の謂れありや。

答 念佛三昧に大小の相なし、機根の領解によりて差別あり、涅槃寶積等の

經の中にいはく、佛説の中に了義經と不了義經との二種あり、末代の衆生了義經の説に依りて不了義の説に依るべからず。凡夫の外に佛あり、穢土の外に淨土ありと説けるは不了義の經なり、凡聖淨穢皆差別なしと明せるは、了義大乘の説なりと云云。此の文のごとくならば、淨土宗には穢土の外に淨土あり、凡夫の外に佛ありと立られたり、了義大乘の説とは申すべからず、念佛を修して淨土に生れたる人も下品下生の者は、蓮の中において十二大劫を経て、後觀音勢至の甚深大乘の法門を説き玉ふを聞て、始めて菩提心を發すと、觀經には説かれたり。淨土に生れたる人も、やがて正覺を成ずるにはあらず、念佛の行若し至極大乘ならば、何ぞ往生の後別に大乘の法理を聞て、始めて菩提心を發すと説かんや當に知るべし。或は大乘の宿熏なき人を引導して、先づ淨土に往生せしめて、後に大乘を悟らしめんために此の一行を勧め玉へり。或は大乘を行

する人の中にも障重く、智劣にしてたやすく悟入しがたきをば、諸佛の議念力を助行として、速に大行を成せしめんために、此の一行を勧め玉へり。若し又利根の人は、此の有相の念佛三昧において、やがて無相の念佛二昧を成すべし、般舟三昧經の説のごとし、たとひかくの如くなりとも最上了義の法門にはあらず。

問 古來了義大乘を談ぜし人も、念佛の行を修せる事あり、禪師の中にも念佛をはめられたる人多し、何ぞ念佛をかるしむべきや。

答 かならずしも佛の名號を唱ふるを、不了義と申にはあらず、涅槃經に云く、龍言及細語皆第一義に歸すと云云。法花經に云く、治生産業も皆實相と違背せずと云云。若し大乘の法理を悟りぬれば、世間の一切の語一切の業是れ皆不了義の大乘なるべし。いはんや佛の名を唱ふるを小乘なりと申さんや、淨土

宗を立て玉へる宗師も、自心は大乘の深理を解了し玉へとも、愚人を誘引せんために、しばらく淨土穢土をわかち自力他力をことわり玉ふ人あり。かやうなるをば無智の人と申すべからず、是れ即ち菩薩の大悲方便なり、然れども、淨土宗を信する人の中に、穢土の外に淨土をもとめて念佛申すをば、了義の大乘となづくべからず。佛説にも不了義はあれども誘引方便の門なるが故に、これをいたづらごとくは申さず、涅槃經等に不了義をきらへるは、佛の本意の了義にあることをしらしめんためなり。眞言宗の中にも念佛の秘決あり、其の説淨土宗の人の所解に同じからず、禪者も念佛を申せとも、其の意趣常の念佛者と同じからず、禪門には定まれる行相なし、楞嚴呪大悲呪などを誦することも近來しつきたる事なり、本尊も何に佛を信せよと定めたる事なし。觀音地藏等を信じ奉る人は、各其の名號を唱ふ、若し又彌陀如來を信する人其の名號をと

なへ奉らんこと何の妨げかあらんや。今時禪宗を信する人の中に念佛の法門は小乗なり、念佛者として愚痴なる人なりと思ひて一向にこれを隔つる人あり、是も又祖師の宗旨は、人々具足せりといふことを知らざる故なり。思益經に云く、大乘の法門を聞てこれを信せず、厭ひ捨つる者あり、たとへば愚人の虚空をいとふて走り出づるがごとし、傍らに人ありて、此の愚人をあはれみて何にとしてか、此の虚空を出たる者をよびかへして、再び虚空に入れしめんといふも亦是愚人なり、大乘を捨つる者を見て、これを憐れみて何にとしてか、此愚人を我が大乘に入れしめんといふも亦復かくのごとしと云云。

問 若し爾らば念佛を信する人をも、祖師の宗旨とかはらず、とてそのまゝにておくべきやらん。

答 祖師の宗旨を信する人は、一切の所作所爲ことごとく別事にあらずと知

る故に有る時は念佛を申し經呪をよむ、この故に此の人の念佛するをばきらはず、よのつね念佛を信する人の中に名號を唱ふるばかりこそ正行なれ餘法餘事は皆いたづら事と思へり、此の所解は大乘の正理にそむけりかゝる人を祖師の宗旨と同じとは申すべからず、たとひ禪宗を信ずとも坐禪するこそ正行なれ餘事餘行は皆いたづら事と思はゞあやまりなり。但し無取捨の中の取捨とて初心の學者しばらく餘行餘事を抛つて、一向に坐禪するをばきらふべからず、淨土宗を立て玉へる、先徳の餘行をきらひ玉へるも、先づ此の一行三昧を成就せしめんためなり、餘行をそしり玉へるにはあらず、明眼の宗師の念佛宗をそしる事は其の趣きつねの諍論には同じからず、たゞ念佛宗のみにあらず、諸宗をそしることも亦同じ、乃至外道天魔の來て對論する時も明眼の人これを見て、彼れは賤しく我れは貴しと思ふべからず、しかれ共彼等が聖凡一絲毫の差別な

きことを知らざる故におのれが見解は勝れたり、佛の教法は劣れりと思へる、
僻見を破らんために彼をそしるなり。圓覺經に云く、菩薩外道の成就するところの法同く是れ菩提なりと云云。不輕菩薩は一切の天魔外道惡人善人をも論せず、皆悉禮拜して言はく、我れふかく汝等をうやまふあへてかろしめす。其ゆへは、汝等はみな菩薩の道を行すと云云。諸の大乗の學者先づ此の田地に到りて、後方便門を開く時無是非の中にかりに、是非をたて、人をそしり法をきらふことあるべし。若し人我法我をたくましくして、是非を論せば佛弟子にあらず何ぞ眞理にかなはんや。

問 或人の云く、明眼の宗師有る時は佛をそしり、祖をそしる、有時は佛をほめ、祖をうやまうこれを抑揚褒貶となづく、是は禪門の手段なり、學者の惡見をそしり、正見をほむるは、是れ則實にそしり實に

ほむるなり、佛祖を罵贖するには同じからずと、其の義あたれりや。

答 明眼の宗師の佛祖をそしり、佛祖をほむるも、佛祖のためにはあらず、學者のためにはどこす手段なり。古人云く、汝等佛祖と一絲毫もかはらずと云云。明眼の人の前には佛祖とて崇むべく、凡夫とて輕しむべき事あらんや、たゞ此の凡聖のへだてなき、本分の處に到らしめんために、種々の手段をほとこして有る時はほめ、有る時はそしる、其の意すべて褒貶の處にあらず、愚癡の學者これをしらず、其の言句に隨つて褒る時はよろこび、貶る時はいかるたとひいかるまではなければ、何なる過のあれば、我をそしるやと思ふて、又これを改めんことをもとむ、今時は知識をたつる人も凡聖の隔てなきことをば言語にはさやつれども、いまだ此の田地に到れる事のなき人は、學者に對する時、實に是非の相を見て或はそしり或はほむ。圓覺經に云く、末世に菩提を習

ふ者すこしきの證を得て、いまだ我相の根本をつくさぬ故に、おのれが法門を信ずる人あれば、これをよろこびそしる者あればこれをいかると云云。

問 凡聖一絲毫をもへだてずといへるに、知識に明眼と無眼とを論じ、學者に利根と鈍根とを、わかつことは何ぞや。

答 人に利鈍をわかつことも常さまの論には同からず、たとひ一切の法門を解了すとも、佛祖にかはらざる事を信せざるを鈍根とは申すなり。實に愚人とて佛祖にかはりたるものあるにはあらず、知識に有眼無眼をわかつことは、迷悟の差別なきことをわすれて我は悟れり、學者は迷へりと思ふて、我執法執の上居して、法門を談ずるを無眼の知識とは申すなり。本より愚癡にして明眼の宗師よりも、劣なる人のあるにはあらず、かやうの法門は情識を解すべき事ならず、此の境界に到れる人始めてしるべし。

問 大乘の行人はかならずしも、戒相をば護るべからずと申す人あり、其の義あたれりや。

答 諸佛の説法無邊なれども、戒定慧の三學をいせず、其の三學と者衆生の一心に具はれり、故に若し一心の本源に到りぬれば、三學の妙徳皆悉く満足すたとへば、如意寶珠を求め得ぬれば、一切の財寶其の中よりふらすがごとし。然らば即ち一心の本源を究むるを、大乘修行となづくかならずしも、戒相とてとりわきて守るべからずと申すは此の意なり。涅槃經に云く、大乘を行じて心におこたることなきを持戒となづくと云云。しかるを大乘の行人は、破戒なるもくるしからずと申すは悪見なり、佛在世の時は申すに及ばず、佛滅後如來の法を紹隆し玉へる教禪の宗旨、皆な同じく戒相を具足し玉へり、佛在世の時は禪教律の僧とて、形服のかはれることばなかりき、其の形は皆な律義をととの

へ其の心は同じく定慧を修す、末代になりて兼學の人はありがたき故に、其の家三種にわかれたる事は、其の謂れなきにあらず。各一學を本としてたがひに、そしりあへるは謬りなり。像法決疑經の中に、末世の時禪僧律僧教僧其の品類差別してたがひにそしりあふて、我が佛法を破滅すべし、獅子身中の虫の獅子の肉を食するがごとしと云云。禪教律の僧たとひ凡情、いまだつきざる故に我執起ることありとも、佛弟子と號しながら何ぞ、佛の遺勅をそむき玉はんや晨旦の佛法は、後漢の明帝の時始めてわたれり。其の後も僧形は皆な佛在世のごとし、唐の代になりて、百丈の大智禪師の時より始めて禪僧は、律家に居せず、別に禪院をたて、威儀法則も律院に同じからず、百丈其の旨趣をのべて云く、末代は鈍根にして戒定慧兼學の人はありがたし、禪を行する人、若し律家に居せば、戒相の持犯開遮五第七聚等の種々の律法を、習學するとして一大事

の因縁をば忘じぬべし、是の故に別に禪院を建立せりと云云。百丈の意も禪僧は戒を用ゆることなかれとはあらず、然れば清規の中に禪僧の威儀を、おさむべきやうを説かれたる事微細也。

問 禪定は諸宗に、皆明せりしかるを、教外別傳を禪宗と申す事は何ぞや。

答 禪定を修する事は佛教のみにあらず、外道の教にもこれを修す、色界無色界に生るゝことは皆禪定の力なり、四禪八定なしと申すは是なり。外道はこれを修して至極究竟と思へり、禪宗と申せばとて諸宗に明せる禪定を修するにあらす、しかれども末代諸宗の禪定其の義を談ずる事はたへせね共、其の行を修する人は、まれに成て禪宗を信する人のみ、坐禪とて行する故に禪宗とは禪定を修する宗なりと餘宗の人も申し、此の宗を信する人も亦此の思をなせり、

若ししからは、祖師西來の本意所詮なきことなるべし、楞伽經の中に四種の禪をわかせり、一つには愚夫所行禪謂ゆる凡夫外道の心念を起さす分別を生ぜざるを禪定と思へる者なり、二一つには觀察相義禪謂ゆる小乘及び三賢の菩薩の法門の義理を觀察思惟する分劑なり、三一つには攀緣如實禪謂ゆる地上の菩薩の中道實相の眞理に安住して功用をからざる妙行なり、四一つには如來清淨禪謂ゆる如來地に入て自覺聖智のあらはれたる相なり、祖師門下に如來禪と申すはこれを指すなり、古人學者に向つて、汝只如來禪を明めて、いまだ祖師禪をさとらずといへることあり。是を以てしるべし禪宗と申せばとて、諸宗所談の禪定には同じからざることを禪と者梵語なり、具さには禪那といふ、漢語には正思惟と翻せり、亦是靜慮ともいへり。圓覺經等に三觀を明せる中に、禪那といへるは是れなり。定慧二觀の外に別にこれを立たり、圭峯の蜜禪師これを絶待靈

心觀と名け玉へり、圭峯の禪源諸詮の中には、唯達磨所傳の宗旨のみ眞實の禪那に相應せり、この故に禪宗と名づけたりと云ふ。

問 眞實に大悟せる人は、邪正に迷ふべからず、然ば天魔外道來りて種々の法門を説く共、誑惑せらるべからず、いまだ正悟を得ざる人は、いかでか邪正をもわかすべき、しかるに古の先達所談の法門も一致ならず、今時の知識のしめさるゝ修行用心も亦まちくゝなり、初心の學者いかにしてか、其の邪正を辨すべきや。

答 末代は邪説さかりにして、正法を亂る事多し、世間の相撲、競馬、圍碁、雙六なんとは、其の勝負のすがたをかねてより定め置きたる故に、これをたやすき事まぎれなし、所領の相論罪科の輕重ごときは、其の理非まことに決斷しがたき事ありといへ共、上裁を仰ぐ故に、落居せずといふ事なし、佛法にはか

ねてより定め置きたる勝負の體もなし、面々たゞ我が心得たるを本として、我が法門勝れたりと思へども、別人はこれをゆるさず、世間の沙汰のごとくならねば上裁とて仰ぐべき人もなし、面々の引くところの證文は、佛祖の言語なれども文は執見によりてかはることなれば、證據とするにたらず。各我が信ずる所の知識の印可を以て證明とす、それも縁者の證人なれば、信用にたらず、しかるを愚人、我が妄想の信を本として何に宗にても、先づ一法門を信じぬれば、餘宗をば皆これをきらふ、我が知識とて信じそめぬれば、餘人の法門は皆劣なりと思ふて、耳にも觸れんとする者あり、此れは是れ愚人の中の愚人なり、或は諸宗の法門もかはり、知識の示すことも同じからざる處に、自ら決斷することあたはず、茫然として浪にもつかず、磯にもつかぬ人あり。かやうの人はいづれも、いまだ教外別傳の題目を信せざる者なり、たとひ悟りを開かず

共、若しよく教外の題目を信する人は、眞實の正法は言語の上にあらざる事を知れる故に、一師の言語を堅執してこれをのみ貴ぶこともあるべからず、諸師の言語のかはれるによりて、迷惑することもあるべからず、世間の食物其の味ひ一種にあらず、其の中に何をか本と定むべきや、人の天性まらくなる故に甘き物をこのむ人もあり、辛き物を愛する人もあり、若し我がこのむ味を本として餘の味ひは、皆いたづらなりと言はゞ愚人なるべし、法門も亦かくのごとし、衆生の性欲同からざる故に我が心には、此の法門を貴しと思ふと、いはゞさもありぬべし、若し我が思ひの本として此の法門は正理なり、餘の法門は皆眞實にあらずと執せば是れ邪説なり、法花經に云く、有を破する法王、世に出て衆生の性欲に随つて種々に説法すと云云。しるべし如來種々の法門は衆生迷倒の性欲に随つてかりに説かれたる事なり。若し直に衆生と佛といまだわかれ

ざる本分に向ふ人は、種々の法門を聞くと、其の勝劣是非の中に心を勞せんや、古人の云く、佛一切の法を説くことは、一切の心を度せんがためなり。我れに一切の心なし何ぞ一切法を用やと云云。

問 教者の中に禪宗を難じて云く、佛説にもよらず、義理をもたゞさず、教外別傳と號して、胸臆の説をほし、いよいよ信じ用ふるにたらずと云云、其の謂れあることやらん。

答 かやうに申すことは、たゞ教の文字を學して、教の本意をしらざる人なり、若し佛の教門を設け玉へる本意をしらばかならず、教外別傳を信すべし。これを眞實の教者とは申すなり。楞伽經に云く、始め鹿野苑より終り、跋提河に至るまで、其の二中間においていまだかつて一字をもとかずと云云。若し此の經文によらば、一代の教法とて實に有と執著すべしや、像法決疑經に云く、

文のごとく義をとる者は、三世の諸佛のあだなりと云云。經論の文にまかせて義理を論ずる事、何ぞ佛意にかなはんや。圓覺經に云く、修多羅の教は月をさすゆびの如しと云云。指を以て月をさす事は人をして、直に月を見せしめんためなりもし其の指に目をつけたる人は月をみる事あたはず、曠さへ其の指の長短を論じ大小を諍ふ、實に是れ迷ひ中の迷ひなり、古の教家の先徳は皆佛の本意を悟り玉へる故に、教の指にかゝはらず、しかれ共中下の機根の直に月を見る事あたはざる者のために假りに教の指を用ひ玉へり。然らば即ち其本意をあらはさんために、法相の廢詮三論の聖默天台の妙旨花嚴の果分とて、諸宗に皆言説も及ばず、思慮も到らざる法門を立られたり、密宗には顯教の無言無説と談ずるをば、猶是れ遮情の法門なりときらふて、其の上如義言説を談す。如義言説といへるは、有言無言の域を超出して、三世常恒に談ずる所の秘密不

思議の言説なり、妄執言説等のごとく心得べきにあらず、是故に至極深秘の處には我れ本と言ある事なし、たゞ利益のために説くといへる經文あり、大日經の疏に云く、如來自證の境は觀る者も見ることなく、説く者も言なし、言語を以て人に授くべからず、傳教大師の弘法大師の御もとへ、理趣釋を借り申させ玉ひける御返事に云、秘藏の奥旨は文字の傳ふるところにあらず、只是れ心を以て心に傳ふるのみなり、文字は是精粕、文字は是れ瓦礫と云云。教文の本意も文字語言の上にあらざること分明なり、教外別傳といへること、何ぞ胸臆の説ならんや。傳教大師内證佛法相承血脈の譜に云く、達磨大師付法相承師々の血脈一首天台法花宗の相承、師々の血脈一首天台圓頓菩薩戒の相承、師々の血脈一首胎藏金剛兩曼荼羅の相承、師々の血脈一首と云云。傳教大師の禪宗を相承しおはします事分明なり嵯峨天皇の御時、日本の僧慧萼勅定によりて、佛法

流傳のために大唐へわたる鹽官の安國師に參じて禪法を相承す、仍て其の會下の僧義空禪師を請じて我が朝にわたらしむ、東寺の西院に寄宿し玉へり。弘法大師此の由を奏聞し玉ふ、天皇及皇后御對面ありき、皇后宿習開發して教外の宗旨を悟りましましき、嵯峨の内に檀林寺を建立せられ、仍て檀林皇后と名け奉る、義空禪師を請じて此の寺に住せしむ、禪師の云く、禪宗の此の國にあまねく流布すべき時節いまだ到來せず、この故に本朝の先徳もたゞ教乘を流傳して、いまだ最上乘をば流布し玉はず、我も亦此國にありては利益すくなかるべしとて、三年と申すに大唐へ歸り玉ひき、此の事を未來にしらしめんとて、唐より石碑をわたして東寺に留め置かれたり。開元寺の沙門契元其の文を書せり、其の始めの題目には日本に首て禪宗を傳ふる記といへり。禪宗若しいたづらごとならば、弘法大師何ぞ彼の禪師を擧達せしめ玉はんや。慈覺大師は山上

に禪堂をつくりて、禪法を御興行ありき、智證大師の教相同異集に云く、日本に八宗あり、南岳大師あり、俱舍宗成實宗律宗法相宗三論宗花嚴宗なり、北岳に二宗あり、天台宗真言宗なり、俱舍成實の二宗はみな小乗なり、律宗は大乗に通ず、其餘の五宗はみな大乘なり、此外に禪門宗あり、八宗の攝にあらず、山上の大師等みな相承し玉へりと云云。顯密の奧義をきはめ玉へる事、誰れ人か此の四大師にまさり奉らんや、禪宗若し胸臆の説ならば、何の故にか顯密の外に又此の一宗をあがめ玉ふ事あらんや。安然和尚の教時、諍論に叡山の他山に勝れたることを歎めて云く、我が山には禪門真言天台の三宗を安置せり、天竺晨旦にもかゝることはいまだなしと云云。聖德太子は南岳大師の再誕也、南岳大師は達磨の宗旨を相承し玉ひし其の因縁によりて、聖德太子佛法を御興行ありし時、大和の片岡山に達磨大師顯現します。太子御歌をあそ

ばして贈らせおはします、其の歌に云くしなてるや片岡山の飯にうへてふせる旅人あはれおやなし。大師の御返歌に云く、いかるかやとみの小河のたへばこそ我が大君の御名をわすれぬ。幾程なくして入滅の相をしめし玉ふ。太子自ら諸臣と石をほこび塚をつきて、大師の御棺をおさめ玉ふ。諸臣一同にそしり申しける間太子仰せて云く、さらば此の墓をほり破りて棺を外へ捨つべし、諸臣御墓をほりて御棺をあけて見ければ、入滅の時太子のおくりてきせ奉り玉ひける御衣ばかり残りて御體は見へさせ玉はず、諸臣皆奇特の想をなしてもとのごとく御棺をおさめ奉らる、其の御はか今も存せり、解脱上人其の上に塔を立て大師と太子との兩つの御影を安置し給へり、太子の説法明眼論をつくらせ給ふ。

其の中に云く、南天の祖師 朕にしめしていはく速に生死をいでんと思は

根本一乘を學すべし。一乗の正義といへるは佛心なり、又云く南天の祖師佛法を分けて二種とす、教内教外是れなりと云云。達磨大師は南天の香至國の王子也、この故に南天祖師となづく、我が朝の佛法は、聖德太子始めて流布しおはします、禪宗若しいたづらごとならば何の故にか、かやうに達磨大師を崇敬しませされや。傳教大師諸宗について界畔を論じ給ひしかども、禪宗において一言も勝劣の批判なし、弘法大師十住心論を作りて顯密の界畔を分別し、乃至外道二乗の教までも事はり給ひしかども禪宗をばひはんし給はず、是れ則ち教外の宗旨は、義理の分別にあづからざる事をさとりまします故なり、智證大師の禪宗は諸宗の攝にあらずと仰られたるも此の意なり、智覺大師の云く、教の中に禪あることをしらざるは教者にあらず、禪の中に教ある事をしらざるは禪者にあらずと云云。教者の禪をそしるは禪をしらざるのみにあらず、教をも

しらざる故なり、禪者の教をそしるは教をしらざるのみにあらず、禪をもしらざる故なり、天台大師の文字の法師暗證の禪師と、仰せられたるはかやうの人の事なり、忠國師の云く、禪宗の學者よろしく佛語に遵ふべし、了義の大乘はみな自心の源をきはむ、不了義の者はあひあらず師子身中の虫のごとしと云云。律部の中には佛弟子も、一日に一時のいとまを費やして外道の法を習ふべし、若し其の法門をしらざれば、彼が見解に墮する事をしらざる謬りあり、又かれが法門をしらざれば、彼が見解を破することあたはずと云云。然らば則ち教者も禪をそしらんと思ひ玉は、先づ禪の知識に參じて、此の宗旨を悟り玉ふべし、禪者も又教をそしりたく思ひ玉は、先づ諸の教門の源底をつくして解了せらるべし。若し爾らば諍論自然にやむべし、若したかひにしらずして面をあかめ音をあらくして、諍論何れの時か勝負を決する事あらんや、談論の勝

負は決する事なくして、謗法の罪業はかならず招き玉ふべし、無益なること
これよりまされるはあるべからず。

問 日來相看の次でに、問答申たることを、何となく假名字にて記し
置きたり、これを清書して、在家の女性などの道に志しある者のみ
せばやど、存ずるはくるしかるまじきやらん。

答 禪僧の法門は教家のごとく、習ひ傳へたる法門を胸の中にたくはへ紙の
上にかきつけて展轉して、人に授け與ふる事なし、たゞ機に對する時直下に指
示するのみなり、これを觀面提持となづく、擊石火閃電光にたとへたり。其の
蹤をもとむべからず。古人の云く、言外に意をさとも、既に第二に墮すと云
云。何かに況んや其の言を記録して人にあたへて見せしめんをや、しかる故に
古の宗師皆同く言句を記する事を制し玉へり、しかれども若し一向に記する

事なくば誘引の路たへぬべし、これによりてやむことを得ず、古人の語録天下
に流布せり、禪宗の本意にはあらず、古人は大略内外典を博覽して、後に禪門
に入り玉へり、是の故に其の所解皆な偏見におちず、末代禪宗を信する人の中
にいまだ因果の道理をもわきまへず、眞妄の差別をもしらざる人あり、さやう
の人の中にも、若道心いるがせならず、百不知百不會の處について二六時中
直に本分を參決せば、なましいなる小智のある人よりもまされり。世間を見れ
ば坐禪工夫は綿密ならず經論聖教をば聽聞することなし、或は坐中に外道二乘
の見解の起れるをも、これは坐中より得たる智慧なれば、得法なりと思へる人
あり、或は自然に教家に談ずるところの法門を解了して、我は禪僧なれば所解
も亦禪の宗旨なりと思へり。予つねに經論を講ずることはかやうなる今時の弊
をすくはんためなり、文言義理の上について委曲に談ずる因果眞妄の法門をた

にも。愚存のごとくうけとる人はすくなし、各あらぬかたへ聞きなめ、或は褒め或は貶る、褒貶ともに愚存にはあらずいはんや。夢中の問答を記し置き給はん事其益あるべしとも存せず。しかれ共褒貶の語によりて、順逆の縁をむすばんこと、何ぞこれをいとなまんや。

問 如何なるか、是れ和尚眞實に、人にしめす法門。

答 新羅夜半に日頭明なり。

夢中問答集下終

一日等持古先禪師携此帙以示余曰此乃左武衛將軍古山大居士久參夢窓國師問答之語茲欲方便引導一切在家出家或女流等志於道者或有學無學使其便於觀覽之故乃以日本字書所謂假字者繕之目曰夢中間答國師之參學在家弟子大高伊與太守者以鏤版爾宜著語爲證明歟余曰吁世之不有至人出興以智方便千變萬化逆順縱橫以導之不知世之人若之何其爲狀耶抑佛爲一切智人然其唯能度彼有緣而不能化無緣也又能以一切譬喻說種種事無有譬喻能說此法以心智路絕言語道斷不思議故然其所有不盡經教無非方便以假名假字聊爲誘引之耳佛不云乎除佛方便說但以假名字引導於衆生此之謂也然此方便之說自佛去後謾也無繼其聲者今其是作非佛再來孰能爲哉惜余不能誦其假字以觀其眞義玩其眞味於節角之處爲之撫

二
掌擊節爲恨耳或曰未之能誦然而何以知其然而輒褒之直以謂佛
再來歟余曰天何言乎四時行焉百物生焉是天之道雖聾瞽者莫不知
之也唯能知其道之所以者鮮之耳國師之道亦猶是歟吾既知且久矣
雖無此書亦莫不知之也況有之哉唯莫能知其道之所以耳又且佛者
覺也以其能覺斯道也既能自覺乃能覺人即前所謂專引之說是也所
謂以先覺而覺後覺以斯道而覺斯民其揆一耳而斯道也亦大矣哉橫
亘十方豎窮三際森森萬有何莫不由斯道也所謂人々本具各々圓成物
々皆然豈唯國師獨然乎哉其不然者唯覺與未覺一間之耳然而々孰
不有哉且夫爾之未始覺也余則指爾而謂之曰爾即是佛當是之時除
爾不覺使即覺之則何怪哉其或怪者是未覺而未知之也茲亦復何怪
哉曰是則信然矣夫然又所謂至人出興者嘗聞至人無夢而此至人之

書乃曰夢中問答亦何謂也曰爾固嘗聞之而亦固未嘗知之也其所謂
無者豈所謂有無之無歟以夢非夢也然則爾其無復詰於我也我不爲
爾重言矣何則爾其不聞古之謬語乎正所謂癡人面前不可說夢然又
如舍利弗問須菩薩云夢中說六波羅蜜與覺時同別須菩薩云此義幽
深吾不能說此會有彌勒大士汝往彼問若復於茲或有以夢中問答如
舍利弗所問余則曰此義幽深吾不能說汝往作禮國師時康永改元歲
在壬午重陽後十日中華沙門梵僊書于南禪方丈
余書此書越三載一日法延首座携以誥余曰至哉有是書而書之若是
此非佛之與佛異相同心殊途同致彼此相爲表裏以化有情曷有是哉
然而師知夫大高伊與太守及所刊此之意否余曰唯知其人是鼻孔
者有年矣而實未知所刊之意如何耳然無過欲利益人耳復何意哉曰

四
 因其人如師所謂有鼻孔故然後知其香臭乃欲刊之也始則國師不許
 高曰或未始有此寫本則已既有之而人々返相抄錄不番鳥焉成馬毫
 厘有差天地懸隔否則展々轉々以誤傳誤而又誤本各相不同則乃人
 々疑惑莫知所歸本欲利人奈何反誤人哉然固是作始爲左武衛將軍
 一人耐答而已不爲他人也譬如佛說一代時教雖一時說皆爲後世及
 無邊衆生耳如不結集而亦安有今日哉於是國師然其說故刊之由是
 人皆知歸安行大道不復妄趨邪徑也余曰若是哉若是哉然亦爾知夫
 大道顯然三世諸佛諸代宗師皆夢言乎延曰請書以誌之余曰是則無
 妨又添一个延復爲余曰大高伊與太守者號海岸居士入深法門心大
 如海殊有淨名之風饒益衆生誠未艾也今年春又遷若狹太守云故并
 書之甲申十月初八日寅南禪東堂之東軒 梵僊 再跋

昭和九年十月十日印刷
 昭和九年十月十六日發行

定價金壹圓

著者

故夢窓國師

編輯者兼
 發行者

京都市上京區相國寺山内
 慈雲庵
 樋口琢堂

印刷者

京都市下京區西洞院七條南
 内外山版印刷株式會社
 須磨勘兵衛

發行所

京都市上京區
 相國寺山内

衆善會

終